

平成 21 年第 3 回定例会市会・総括質疑（平成 21 年 9 月 25 日）

質疑者○北山順一(新政会)	答弁者○矢田立郎市長
<p><b>1. 新たな国際交流について</b></p> <p>昨今の社会経済情勢は劇的な変化をみせており、自治体レベルでの交流を越えたグローバルな視野で市政を考えていくべきであると考える。</p> <p>本市においても、姉妹都市、友好都市、親善都市の関係を結び様々な都市と国際交流を行っており、これらの交流により、市民レベルでの交流が根付いている都市もあるが、残念ながらそうでない都市もある。これらの従来の姉妹都市などに留まることなく、更なる積極的な国際交流が必要であると考えている。</p> <p>企画調整局、国際文化観光局の局別審査でも質疑をしているが、そのなかでは国際交流の重要性への認識は一致しているものの、それが認識だけにとどまっており、すぐに具体的な取組みをしていこうというようには感じられなかった。</p> <p>これからの時代は、人材交流により人材育成が図られ、相互理解により互いの文化平価観が高揚し、また国際貢献により都市のステータス向上に礼つながっていくと考えている。一方で、地域には退職を向かえた団塊の世代の方が致多くおられるが、これらの方々の知識や技術はこれまでの日本の成長を支えてきたものである。</p> <p>例えば、世界的な課題である地球環境問題については、世界規模での人的貢献が必要であり、環境、エネルギー、資源の問題についての団塊世代の方々の待つ知識や経験を活用し、環境問題以外のものも含めて開発途上国等への国際貢献を展開してはどうか。</p>	<p>ご指摘のとおり、海外との交流というものはグローバル化社会の中で、大きく変化している。従来の友好親善に加え、ユネスコのデザイン都市交流も一例だが、世界相互都市ネットワークというのは、互いの都市の物性を踏まえた、双方にメリットのあるネットワークを作るうというものである。互いに相手の物性を理解したうえで、交流をどう進めていくかというものがあり、またもうひとつは、これは開発途上国への貢献にもつながると考えられるが、互いの都市が抱える問題をどのように解決するかというものがある。</p> <p>そのなかで、開発途上国への国際貢献においては、笹山市長の時代から神戸国際協力交流センターが、神戸市と国連人口基金と連携して、東アジアから南アジアに至る 9 カ国 9 都市の中規模都市を対象に、アジアの各都市の直面する問題の解決に取り組みながら、人材育成等の事業を実施してきている。</p> <p>ご指摘の、団塊の世代の方々の国際協力分野での人材活用については、神戸国際協力交流センターが、企業退職者を対象にボランティアを募集し、これはかなりの応募があるが、「シルバー国際協力ボランティア」事業を進めている。本年 2 月にはインドネシアのスラバヤ市に現地調査役の派遣を開始し現在まで延べ 13 名を派遣している。</p> <p>更に、これらの 9 都市以外にもアジアやアフリカの開発途上国の行政官等を対象に公共政策、経済、防災等の研修を業施しているところである。その中でも防災コミュニティは「防コミ」という言葉として世界的にも定</p>

また、その際には、外務省の地方連携推進室を活用してはどうかと考える。外務省も外交を推進していくうえで地方を重要なパートナーと位置づけている。

本市としても、国際的相互理解、ブランド力向上を図るとともに、在外公館施設利用制度の活用により、本市地場産業の国際展開、あるいは観光客誘致といった副次的な効果も期待できると考える。

また、世界各国から研修に来られる方を積極的に受け入れるとともに、留学生ネットワークを構築してはどうかと考えている。

神戸市内の大学では様々な国の外国人留学生が学んでおられる。そういった留学生は、今後の神戸の飛躍の一翼を担い、神戸の国際交流の一助となる貴重な宝、財産である。そのような留学生と本市との絆を強く固く結びつけるとともに、継続的な交流へと導いていくネットワークを構築すべきであると考えているがどうか。

このような取り組みは国際交流都市を標榜する神戸のまちの輝きの一つになると考える。都市戦略として、国際交流都市神戸としての新万々国際交流を展開していくべきと確信している。見解を伺いたい。

着しつつある。

また、在外交館施設の使用についてはかなり制約がおおるようで、別の場所を用意する必要があるなど、今後、互いに連携するうえでの課題がある。

留学生ネットワークの構築については、現在、中国、韓国、台湾の留学生が多く在籍している。

そのなかでは、留学生OBによる同窓会ネットワーク構築にむけた取り組みも出てきており、例えば、神戸大学卒業の留学生による同窓会を発足させて継続して活動しているところもある。そういったことを契機に韓国、台湾、ベトナム、インドネシアの各国留学生が同窓会組織を発足させるなど、組織化が進んでいる。

それらの組織を繋いでいくことは非常に難しい面もあり、密な連絡を取る方策を考え、より良いものにしていく必要がおおるが、現時点での状況はうまくいっていると考えている。